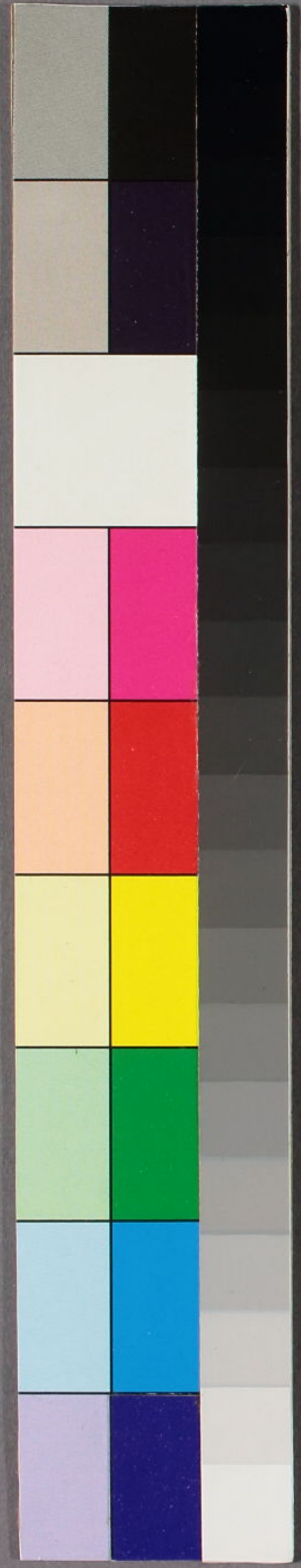


江戸廿歌仙

延享二年十月刊編



正寶廿三の仙ハ芭蕉の
翁乃花をあり此廿三の仙も
延享好年の屯ありて
た城ましをるま好實を
結ぬきしを俳諧の
変化ハ時の花も流行

すもむ山風のまはるる
霜よりつゞき凡嵐も
ち〜次百世千趣哉
残〜彫り〜物あつて
衰賤に終り終りさきハ
と〜の〜後〜後〜
お〜王あると母さき〜

悔ある。為。悔。ある。お。お。よ。と
一。と。勢。如。詞。美。云。義。を
四。時。乃。派。林。と。あり。て
今。あ。よ。諸。花。を。束。ね。る。ハ
彼。山。中。不。材。の。無。用
ある。我。除。き。さ。く。阿。ま。の。月
梅。柳。の。こ。ま。や。あ。お。よ

及ふ志を心な江戸川
のひろたよきと見えて
風情は此のさ根乃むよ
あゝと

舟一

湖十

梅折をなめし初く舟折哉
初いふひりや雲やまの末
大名はさき前乃小舟漕りて
馬越忍れをむら雨乃初
一艘と二艘と渡一漕わの初
いつまきく舟や川の賣砂

干瓜を明けて髓乃筑新巻
三味線の音跡やき深川
十五うしむるもの間乃を去さ
中より及ぶきに漏刻を賞
大壺漢打く柴木る下屋敷
青い扇ちほふぬふ菽入
多ちるものに貸して居たき後帯
月蝕晴て花乃因あ

八色

きい足袋大坂人の履造く
子平亦まさる元物乃後
花の喜酒呑うまは餅たけ
恋み靡くす灰毛猫あは
十
越付也雪跡をちくすちのわこ
日待のふ化狐寐う次紅国
氣のぬけと繩ともち五有る
麻と巻と乃その門信濃海

大男杜稗をん侍と只並に
灯の賞て元船身出る
清拔乃古ひよ冬を待れり
名もいりく下けゆをり
あつまひて在島城の架半乃燈
滑虚よあゝは富士の頂上
那階いもる山奴親のよみ
松も木こまき内かゝの入

日乃軒の雪よ降らる中祿寺
善産もせよ焚火の飯
脇のままた猿乃立す
毛氈ニ扱借り物とみく
老松れお恩の門を善の杖
去の瑞籬よ大吉結幕

才二

盤谷

明星とむのハ命と成鞋か解
艸乃みむも結ふたそよ
淡焼の鯛も揚子急をカマて
務の骨眼鏡をさす鼻紙
登申を玉の鬼や眼を人
乃りとる玉毎に秋と志る尚

朝のほの花よ何れす茄子漬
宇治の焙炉ハ店ニ至ル侍連
胸の桶も手よふれぬハ乃宮
餅と種に昔惜世に
をうくを血の如しはす里見
宙の如竿ハ爪立侍妻
侍のきれいの字もこひふれぬ
四十までハあいな国夏

梅路を半分打て遊山綱
耳を引出すきゆらたの月
葦の山ふもとれ寺ハ皆きき
千羽馬も雪入り入馬
濡もせめか茂侍乃歩行
献立よ桑原朝念の産
炉用也粗言袴浅茅山
ゆきハぬらハ海原の松

奇まらるゝ如く一向ける馬の鼻
小娘いとりり帯成りぬる足ゆ
いとれく賣れて蛇もけりぬ
ふらとけく社 町もにきぬ
弥陀のむい隠居の西の南門跡
ちちりー 荏弱 穢き飛ねと
殊なまゝ蓮も涼くく流の月
蕙々垣根より刀豆の蔓

鹿笛の麻ハ揉る釈もちのりなわ
筏行へても堪哉九た哉
嘘つゝぬ人き少くハ京彦王
茶包とや 伽羅も一 蛙
大名と向ひ合へるをれはら
楓もわのぬむすよ 夕陽

卯三

和推

出代や枕乃夢れなきところ
よよ返河の果ぬまら農家
名のなき花枝画よ旅もちて
引盃へちさむ蒸菓子
清くと昼ハ陰の月の
菽棋子照内揚石の側

米つきに江戸越く尸の声
禮はくちる。古乃山 風
我ちりしつる涙のあるもの
立てゆく未成傾城乃 幟
次女續一向くハ並ふ朝清め
響れ音り 越れ末の子
笑にゆく自由の足アるたのきハ
越へき峯乃聖の漬物

本服乃うはらゆる八幅
好んこやうに降晴れ 雲
脱捨る月の入は乃借一袖
白きの上の新豆腐を
+ きのこきよ窓暗がぬ桐乃款
葎さくをの吹笛主の業は戸
管笠て風よきまがく其すか
月よ七日乃法のま 乃

親の氣は休も一川霧を建
物よく賣れて行例ハ武士
産めを取罷おとろきき卯
依も恙とくる夕ぐれの鐘
辻駕て前渡くする云は付
髪を惜めを容儀こがれる
夏は月浴衣ハ依伴豫兼
サすよ心の冷やりと教

律傳乃裸てひとりの糸と針
書物紙借よ屋人としてある
山川の風も静よ茶釜燃
る乃とらら無る身を訪ふ
先達れ色おもくも花盛
耕 秋も乃乃けきあり

方四

存義

弘法のこころも一字ふかく
柱杖ふむきよ滝乃いとゆ
長款ふさくもあを味て
あ齒二枚ハ象牙をあり
兒醫者にあり袖巻て月の眞
かそ江續れたのをれ初汐

精城あせもあ敷たをこ入
惟やしくも似る鯛乃面
廊つきも夏のるハ俾縁兼
うこちれくまほ家の思髪
々二日第もさぬ物思ひ
鴨ハいやうと鼓を枝打戸
志をさして人も亭人雪の簾
吹灰さるく谷乃小使

能ハ住む登もさるのおれ真
花もさ下目の小言もさく
清まら末の眞もたあら月
傳き乃瓶をさるるす
⁺ ちのよと共の古曾れ園あえと
酒吞ぬ目さる麻といふあり
けりあ寸飯喰鳥又か人こ鳥
佛間も寐さる後を侍あ

およぎけて紅の二布又我を位
芝居城をくむ漢乃高ひ
捕者のさき又飯のたぐりあり
白髪天窓の悴たもくも
鞅師の志業ハ人も笑くこり
狼吼る 志山 徳く
松茸のあはれこそ何ぞ松ふり
家のむつニ城守す處 霜

下初置も一門ハも^持らぬ古意厚
とハとんて元日の灸
屯がのニ孫彦去彦並居け
友の志しきをけけ旅
迹をくくわさきも漢守破乃波
日赤のいまる 袴の塩 梅

すゝ

有佐

賤乃女の切火よ清し 蚕 棚
よみ茶乃白し奥深き 寺
笈士の花ある辰新若みし
阿まのく泊れ五十三次
旗竿のかきく涼支風は有
茶采乃箒の一ぬきあり

井戸堀れ是とれをみくき
裂と羽織乃屋守寄合
倫旨あり夏は持葉の入
姉乃生れささ子乃大雪
當世ののちとといき額付
まゝ甲装あくの的の灯の消
森川の怖くそくす一里塚
五女の綱と瓜や李の

昼乃月帳の釣子哉玉 禱
細エー小孩とまふ足 粧
深草の裏はうらみぬ巻き
笑ひく曆借ふ出のり
大空ハ天よ遊んで地虫釣
十二三ちる 孫を指 妓有
西側ハ女の毎向 浅草寺
ま似るまゝのハ出まは取楫

給賣の暖簾ハ杖乃下を吹
甲陽軍ハいろはやく讀
人志々ぬ整と白記柿乃并
去来の月持めつこみ、な
分量ハ目の性よき有持新
囉子乃記をむし一の教す
尚蓋の平皿よ木より新田姫
死とも死と伽羅ハ杖きぬ

膏茶ハ五ノき湯屋よま外ハ
風よ表ハ白ノ帆をりけ
湯鴉なるお七の信子を尋り
羨とやいとらん今のむらる
旅の芭床間かしら鞋履て物
市とくも乙魯塵はもる山

平砂

平砂

山くハ雲こそ圍ハモ川鯉
十里乃楫の向ハ卯時迄
花普徳子引れ石を子又成付
一 迹るミモ下座ハするハ苦
汎ハ消ハミ消キ水ハ月夜
独將ハ海ハ芽城荒ル人

角力取多上婆よめり合
敵の志れと聖の大海
あも亦持突て神や飛ぬん
まのいさしけ破鐘の声
妻ありぬ妻いぬう寸帯袂抱
たを思れも恋罣の眼のあ
水際ハ是そ来名乃伺つき
有明さむく帆の虫をさ

雪隠より運ばるなき笠掛て
人冬引のせ仁王祈りせ
又器を忘れ皿を点きてむよ飯
小紋尺よと蛇腕のをめて
立前よ出入屋敷紙の峰
侍を攻され志をも搦酒
袴下あり捨子詮る糸れ
藪ハなのつらゝ寐をさよ咲

ぬるれの坊うあゝる海印堂
ふちろく足たろくまめを篤信
魔丹の草れ黒焼ぬいす
子信ける窓又靈糸お窓
秋乃秋乃矢ぬ放さけ五六通
三十臺とろくねとい月
入唐の支度ハ瓜又灯をり
禪たたく勝乃音きけ

茯苓の松の齡も明くまろそ
脈もろく世の金を待ろ人
以吹雪情身ふをわふら
箱乃蔭ろく便私をすれ
花の次は戸を字ハよハ字形
このむとあれをむぬ大鳳巾

才七

米仲

若竹乃何處々々々々雷の音
かまきり子も這まぐる旬
折れぬたのちなる新秋をさるん
万々つけて水向の家
月と花を先五六升象氣上付
春も此はむくき秋夕

禪又命のきり乃負すまふ
衣をぬくといき家小坊主
古更残るは下きお
姨捨山平續々松本
大橋乃葉末終るて並ひ
尺知里を付終るあうれ面
末ぬ喚は程月雲残るまれ
果きのさめあ志こるし

大坂一人と流まの十二里
朝の各あうひすおりき
き次のみまはちもぬ使や
人形はるすまの古みやけ
ナ 龍意の出現佛ときくうに
いしやを尺せく男前おれ
捨扶持ようちかうる物思ひ
用の袋は丑寅乃を

きろくと濡るてあましく鳴馬
を志れぬ草を膏茶小平
茶漬飯ざつと仕ゆふて産き出
あ人も多ハなれおまらなふ
名斗もあまた冬き産造
大豆をとりぬむと云は海乃
わきれてハ闇かとおもふ十八衆
佐州よゝを産痺の産

痛冷と後ハ産くハ口ハき
諸方の状をむとゆて書
ざつ産いて何のけもなまをこい雨
みつと合もまけぬ黒犬
甚盛骨かす舟坂きためらわ
ぬたつてまて乃産せんま

笈八

祇丞

高款の志乃中は牡子とな
と手好建一斬唐所の夏
狂之師柿乃深物取多む
大脇差の較又吞き
くしの身跡をひるひ
芋も地酒を入渡る

秋風は新橋をくぐり弱法師
幕の拍子より犬の鼻つら
昔の指もささぬ松をわし
秋おとさきまぐれに神
大門をきんきあがりて玉乃輿
潮古の胸のみな人の恋
身を雲に疵の片くちと晨かじ
鴨を四角よほく世凡呂敷

我秋の袴をうりも五とさり
大橋流ハげ度の 曠
山寺より砂糖をたさし華心
てふの目南風吹ちる風
萩入を釣しくと秋の日記
いろは短哥よ似る 侍
醒井も番場も義理のまゝ
この大本とあたる山伏

雑兵又右金賞の呵らきて
はくく汁具柄杓さるる
水瓶にちりて位 鮎乃泡
苗吉を記ふ支離ふこく
張上る喧嘩の声ハ 勿利天
身浅る楊や車片りけ
きたまぬ六万坪乃吉の結ひ
秋もわらふに角力まぬこり

毛蒲固よむの膚を打まらせ
自羊靴をせる川さし乃状
おくよ在おの役は赤豆飯
斤鬘付おみとら子の巻
花よ来て本隠りの信也里
小田の煙乃射よ彦くをふ

才九

買明

石川乃かどけりちめて堂哉
枕の方へ曲敷良小屋
首より笑ひと戸を招く人
木るかくせと訂くけに
夕月に角なき桐の葉のそよぎ
小角豆の縁を 紫乃秋

初汐よまきりて眠る鳴の響
二階住居ハ氣も僻む苦
腰縄を付ぬきわたり娘よ
ハ坂あさりハ谷ハわのれ路
物賣も五月ハ雨をかつき
今又眼醫者の顔も見え
活經のおもく人を道とら
ふいこ糸又風休むし

漸くとハ目よ海る月姑と
滝その町^チも泊るこい町^チ
けう海を吞いおきた花めらり
^ナ枚菜乃昔も蟻の目掛
種^チ鳴馬丸殿もあきなり
菜の内事乃冬^チ這ゆ
失ふてさけ知れぬ拂^チ物
日和ハ結うて今月も小

又出でて探耳し、突けを爲し
一巻ありて、慈に如き
松の根より、第一節、守
目の働しき、水車守
里ひ出て、氣流改、如き汁
胴人、形乃、白く、立
有、乃、月、志、も、後、く、も、志、如、く
色、や、ひ、捨、る、舟、乃、陣

音、既、と、り、倒、れ、杖、を、踏、し、ま、の
二、節、又、碑、道、分、乃、酒
や、の、と、下、に、結、火、傷、の、氣、は、よ
き、り、く、と、至、於、小、鼓
是、の、主、八、十、八、乃、事、主、の、り
者、無、乃、國、一、頁、ふ、て、の、書

才十

秋風

柴乃戸も閉りしよりり
可く寸のちる辰低き日
糸代もや直清須大黒布
着せよ 四糸海身 笑え
安きよ 雪洞へ松きろと
母又丹の款 幸味大根の
少をい冷し

障人の糸のそる江戸乃秋
かーだらけてあはる服屋
雷よいよくきくお鬼
侍 とききふのふ乃井戸
実あるぬいまこと小短く
立出てぬき乃夕暮
深川や梢さひまがかり
下戸結卑怯ハかる昔い歌

念仏にかさをぬれ 智老学者
かりよ借恙は袴折こむ
葛籠ると下玉結花の色
落の糸かけて目をいよ魚
+ 同さされ今八九十の老よをよ
志のふれす 森の野 衾
意まじり如法度は浮世祝ひ町
響むすんて 振離の水装束

白雨乃志そこまきあくるけ 夕
まやま物く木くの神極
さる色の新お肉より古なる何は
精進嫌ひ恵心たをきつ
桐河名のおい隈をよ廣小海
すこく地引のむくく太平
酔醺海といふ人よまきしり
寺代友の子に總針

山鳩のなほも妻うふ雨の中
材木伐り川木をたのしき
天満橋天神橋や難波橋
肴にちまきむ舟登の箔
大庭の親乃讓の花れ陰
麦あむそらに句よ 晴

第十一

樓川

山烟や麻のふりむく番
古檣乃庵に紙わさる秋風
梳けさう座敷を月の友に
羊羹までハ奈我城下
志津や一緝の暇無小深家
川舟めぐそわ〜ト井の縁

伏見なる喧集彩又又喧花
弓矢ハ幡山の百姓
揚屋よりきく債の酔み狂々
十九のふいよく羨もえん
あさか不れ糊る妻も死にたり
さ乃街ハ盆あいのまの
瓦やぐ檣場を月ハ萱り新
灯の末ぬらふ探むとる

作夜も素湯を吞ともう楊枝
醫者もくくけ夜の別者
音は関唐樹を打まハ舞の雪
建く大工のきくぬ機戸
曲水は吐血流あつ下屋敷
三味線もつて途る朗流
銀の櫛おぬおちりぬ落やすき
惚る男乃鼻の先人智直

物干の燭のほらら夕涼
川内ゆく一寸れ
なめやかに市女も財布を
始らるる謎むる申の暮夏
今更つて芦の湯をまき
店乃後任とつた浪人
即待はるまゝ内れ庚申
ふとこ入舟の徳行忠の果

馬帽子屋も懸ふあやうく司る
塀乃首斬はらふあやかの
只御より足指は尺もある近眼鏡
小僧のあまをまけぬ神の名
菽一重あちるハ神乃花盛
雨は清く芳一き州

やう十二

渭北

人むとりの通らる雁の水鏡
葉まきたるね稲荷よ髪
と続ぬ月物費ふ客かよきて
連ね声ある一國元め唄
赤貝浪水くへておもゝるや
春待薪に俵打急せ

此沖てすこる破をいふたり
咳く蓋はる。墨染の袖
たきかけて述は猿乃足は裏
屋根うら石の落る四阿
つゝもなつ時又寐えてみおもふ
小ほひ袋を引かどくちあり
筑波より吹てわ桑の虫の降
卯月新敷乃登は棚橋

主従の小尻かへハ腹こなし
浪のすぶら乃拂い尺八
くまをり去のきひき花乃布
あは籠柳の正西もれ
百子を稲負鳥呼子鳥
紫宸殿にそゝ乳る旅人
しめとて素湯は甘き水のりあり
あはるやを川雪日いつの圃

あそふれところりと結る屋きたのこ
添人くくや返す虫よそ
聖浮れ船より疾る肴 亀
祇酒一帯志みる古
打まゝ新為結友の足半し
返るとも起す 門口乃鹿
朝の舟度返はすこく象斗
もまゝ 芦乃種ハヤク 飛

松島や象写りけて死に才
盟を踏て這入居凡呂
尾城立て嘴すり寄友馬
兎ハ書院乃隣子うら白
袖よ初小花足車の揚 産
ちまめきあく里野ハ叶乃妻

才十三

木髪

鳴耐又男麻八角城かつき多
笛もささるる亭花乃中
盗まきう加杖の釜め輝たぐ
志るしれ平雲乃ぬける風呂敷
鞆の抱ねて足を打違ひ
階子を入流花の挿合

揚梅乃核紙投れをみりて
太夫を二門はらう高に賞
御内儀も白眼とさるる茶履を
下卑ころり少淡路の神
付本屋のかけて渡す貝杵子
志ちくく明く日蓮の口
川の月吹き出れて鳴鶴
徒翁の刻乃み又六文

為代新様よるゆる熨斗包
京九重の桶に小便
花の山乞食も胤いちりり
犬の流れて仕せよ曲水
ハまき酒屋の門も釣乃具
頬摺をくく赤子わのち
おそろき満ちの戸ニ
尺八ぬけを四橋ハ
間

むきい髪を人々世帯にけり草
亡ハ乃方 役行く寐る
石灯笼 壺後よつきてし氣をゆ
心の猿乃 風 尺くぬれ
まろ坊又 田はくみやく夕暮
水ハ吞きる 三日月乃 鎌
脇差のとももたぬ盆踊
きぬくにこまね 郡内水町

艸の戸や嵐をそえて 拂物
精を為るに 禪師すは
一門の外や又なる 喧嘩く
且那乃 ぬきと尺く 揚弓
釣鐘の賣口 出末て 志きる
こかせは ちくく ことの 築め程

おの十四

旨原

投く竹角力や砂又松乃乾
宵中きこするちよの躰
雨なき海山初く月をみ
奉白の海ときく又旅さう
るに酒むよと飲せて業々
おとあひ包む栗の市人

〇三九

歌乃ちら又梵天とて河の中
橋と芝居の損くくし
六つ七の下め男を誘ひ出
死なば苦をも麻紙押く
帷子の睡さむくよれあうり
本の枝おろし髪を伴を
芋取すくハ我を好きく
富貴那の舟をふるよ益あ

宵月に風を送れの鉦太鼓
一町入るを三圍を綾
恙きして苞の持よき子位附
友乃盛よ四月の礼
あそび無竹がこわけて春
盲たききり女房追出す
花のぬを舞を兼よ思ひ外
盃洗ふ周のあまき

穽師まき手家の船を射るべきの
期日夕日に屬、詫乃金
府中とい暖屋を忍入一町續
餅をさきいてまい、非那的
け、此のうき忘れ、おとぎ次
と、夜奴の志、わく、傾、殊
大雪乃、月よ、な、り、る、ま、は、ら、の、こ、た、は、
俗て、衣のきよひ、よ、ん、た、ま、ら、ん

三味線の撥、く、ど、つ、て、鳥、羽、の
盆、お、ろ、し、て、お、ろ、ぬ、ら、の、茶、屋
下、籠、よ、き、ひ、く、入、し、鬼、の、豆
あ、ま、い、な、火、を、供、ま、に、め、て、
美、巧、真、子、拭、か、の、清、く、入、ら、ぬ、
答、は、ぬ、以、ぬ、蕨、繩、を、ま、よ

才十五

和專

秋乃葉枯浅き焚火や夜
拾 百坪きく寸丹のちあ草
る工部儀鵲衣子風流
い川るゆきみーか刀の鞘
甘い物余り多そそるあもえ
打水かと乃ほ井筒あり

横雲の鳴るのさへ飛のい
多上安乃引すれり
胡蘿蔔を力とあふ青物屋
雪にたす日も拍子こもり
恙息子戸籠をとり入るわと捲
ちいさい檜紙や居後香
松の根に寺が建一候表所
花を酌あう思ひ 盃

月や日乃下よあつて雨菫露
春やむのの煙の煙を巻
脈病の杖に巻けて程も
ぬす向かへの紅紙あき切
赤鱗のまはのきまに投つれく
志をくく外科の居日蓮
伽の圃子胡まで星乃残るあは
御どくそろくの己の痒さ

離形よ虫とつゝ字をづくとも
何年なるやうに換校乃余
京形町襦袢ぬきもあつたなり
神の傳モリり猿太夫と
砂糖水人の命を引のはし
知り便乃細長い箱
此月に眠れくと琵琶の音
淡乃香のする妹の夜すうら

渡鳥も羽帯と成よつり
よい帯袖で小僧勅うぬ
廓とつゝ名をうけた人のまゝ
一むら雨の入江はのゝ
牛の子乃きうきいなる志の下
きつと揃へて来る早巖

廿十六

紀逸

風ひぬ人の目流やあし守
おの度きもなしく何れあき
持よきまき鏡ハサ一淋く天
あそく白よ伝とさき山海
いなつまけも後ふ折れ樹も乃
野分乃何しき垣も離色

〇廿十六

太刀佩と使もぬけて袖乃扇
かたまたぬき入り袂を抱へ
こほり也ー投てりくもけき舞こ
二吹限てさまる木よりト
夷儀志ひす汁又鯛をすし
江戸の目てんくく京の人回
阿まのり第まき今ハうら表
ぬの揃りくる花を

摘まを流とせくハ流を
やよ入侍をまのり是て
凜直病起傳の符とあるる若
きー向てハ清い行灯
ほも守多く吞くならた多
八日乃証の杉もひ入き打
馬喰町安治の上をましま
紅もろけい物の敷じ

我書ていそく夜のり
かき一務手の白く松扇
胡魚ハ何れな方一氣をとり
去蕪一板は由やをくせ
更る力上戸の額きめく
又算盤紙堅かて尺せ
菫乃根又淡のきやく湛一沙
車来ておる約束の松

曇日に雲が袂乃きひ
阿蘭陀提刀おもし
うき鯉又山葵の漬ハ淡路
春をとり去 御屋敷
新しくお織仕立るを衣
かきと色八重に於核燻はし

才十七

再賀

業漬は根の子業て上里りの
葱大根より低い水際
輪遠は素人かましく思をねて
親較のなは是程の柄
盛砂へ産及踏込門は有
角力太教にまぐるるる

尾

初茸と位牌乃下に粘とまきり
幾川借ても切ねぬ 鋸
水牛のおうし角ねとく奴
の乃さまきく辰うぬ
志古山花なき木くも折れぬ
組飾うくかうよ 苗代
糸縄とおとを掛ひのいこのわり
看賣うもせんハ一チ 声

結と俵小紋よあきそくしをとり
上車もおろのや伊勢ね嘘つき
力師をまきまきれを用のあま
何におひくして宿あるか
+ 袖襦と血も赤黒を款付
併屋ね板のなきハない分
川崎乃先てりまき物 指
縮め襟のよなきえ 沢

ら馬をたぬ尾乃ほのくと
和韻の例も茶ハこむき多
旅好の版も念念とことなよ
桐油着るちち手ハ遊ハ如
枇杷乃樹に京はきい志の咲
少——ゆむを燭臺乃振
三日の綾子た顔も似れを似る
榮も此の地の新も出る

萱薔乃奥ゆいさき文庫蔵
我も惚く此瞳すいす
死ぬべきすの男れよいとむ
奉一書にこそこ袖かあるこ
獨吟を慶光院を花乃親
菓くもら 荏乃あそみ瑞羅

才十八

石腸

親君を人の性来と六心の次
谷もぬたつみ雲の暈咲
土手花乃今度れ松ハ花西子
以くく吞ても父よおぬ月
漏刻乃水せたる手妹坊風
戸の明立年雁もるん

瀬の四温泉へまゐる初なる成
泣く子と飯乃み程と知
雷よるし四五五〇〇〇
く〜ハ其書の日振やる
う〜ハ時きい程授をたせと並
小姓あ〜く待 毛れ衣く
田樂よ吉を焦して三去乃
尾を引ても永き日始行

大勢ハあ〜ぬ〜と新渡一
取つ居て来る市の漸際
おもたぬ候〜附よ冬枯く
急暑とのよ〜に 盗ま〜く 猫
言安城ろ〜よりよ〜の木ののりあり
あ〜〜き〜〜を 經水の味を
さ〜き〜番茄子は安いた〜のりし
子也〜梅乃上の 松原

横坂一也は雨を多くき証
直ぐ隣の家を去りて
志つゝある物よ突棒刺杖ハ
三社の詫言續てやせれ
算盤乃たましく人は成あせ
二百十日の銘の太く
けさむむり縄之渡力搦
楮の花乃残るあ入

別當もいふあり者。七面
にろく大根の菜ハ淋支
是かとの長屋子煙の一寸あり
齋乃由ろくろえり行末
乃連もきろくに華の世山
男むすひ又野沼れ幸事

第十九

蝸名

白妙に三ひき流や雪乃上
枯木志くお猿猴の曲
うのりよとちんよ鼻ををちのしを
衆ハ賢なき奴ちりりり
二階のり晴の存のきんさ降
暮まごめ初初

花為積産達と招くは
一升位一泪あてうふ
朝夕砂汁の突撃るも海門
片ぬ子乃在く門の鶏
賜を孝母よ入くまのあん
心あまりてぬよ弦折去
きひくも石屋の松お涼とくり
是も被取乃茄子流る

南無大慈大悲と續く口の由
果清 通る妻の衆乃力
人間は分別さるるを成盛
御被取を背負てお智
肝心乃熊聖松尾を貸たなく
+ 当守よ森この親の友達
雷お焦く舟を引上て
胡片のこ合野鳩合次

飯又酒のけこみも伊達おしや
元もいせいと誰のこころん
枯燈尺よまの砂乃深火繩
晦日より繋糸く賽積の砂
又して連飲くの人あつめ
黄粉をつけて披む南風
宿は夕陽石の殿よ追ひけり
出合のらね波と縮書

常たて藤の藤はぬ世控人
余亦乃雛子の煮焼すまじ
何をもそ一羽れ馬やのまき
花のあふりた廣徳寺お
長た日に古きよ本れ石さし
詩よ作らるる春の 拾

中月廿

馬勃

百年好日乃教予人尼拂ハ
寧如梅の生れる色
俵より重よ 養まる 扶持ありて
庭を 刻て 垂や 駟
行办のよみ今も弟を念いつくは
竹蒸てもよき 秋と旅より

舞をよめいさく舞の氣の葉
江戸をくめての代公を足おる寸
刃次うして胴突乃繩より
乳母よおぬおと他人うら
むとろ乃鞆の者もかほの者
門ハ泥乃背戸ハ志々雪
入聲を古い小唄をあてこすり
金の海老と猪牙を一艘

夕方に又活くる竹奴人
腋紙足ぬらゝ吸物を出す
首筋を乳の登流花奉行
菘への来て枕洗をせ
拭ナおとも撫い毎夫ぬ嗟哉の釈迦
十町四方沙汰乃ハ娼
計の隣深き奥より持て出
あ鴨の卵くやむ炎天

虫干よ并し拔る初辰も青葉
施りの垣乃多門と一日
寫紙今下置てをくれぬり乃
箱根乃関て解く雲髪
きる命黄子命儀日可延て
ぬま紙くまよ雨の弓張
亭主乃氣知ま安きまの庭は秋
くりしまくと推のわらわく

曇徒ま何ぞが又習いも
声低たうた天晴を騒る者
少一ぬのまよ起ふと物を蹴る
申よ若このあけは乃行
我子にくく花れうつ木猿
嗜わのくり

春

羊素菴

抵完

菱を如一日く乃おと水

夏

馬の尾は繩乃くく異は成

秋

葦はよい近ひく存つ葉

冬

沙城を心の裏に非せ有

終

終

栖隱之吟二句

兼主乃机のうゑ平
忽然と吐む
此のうゑ平いさよ
這うゑ平いさよ
あつ終るあるいさよ
入るを片うゑ平
味あ朱を嘗めたる

まじりぬのまじりぬ
まじりぬのまじりぬ
成るまじりぬの
憐れ

黙齋

かろき乃陽気から

七十翁 常仙

孫のぬ子終る孫入

跋

しつふをきか哥仙ハ

をのく 志誠あをせすの

梅よ起こふ乃花百集

の魁と安れも四時の花

はし次郎をや 屋妻

ゆのうらう 舞のあま小田乃

種の上よ海を渡るおちたりの
名残をいづくさうも
花のさうし秀みかお妙の
花さうまにわつ穂を賄ひ
香乃世さう入をまゝ手中
のさきまらとさるあふは糸
あつらふさうきくも軽か

いおまのハ價ハ囊中の
錢を惜みます まゝさう
詩酒の媒あさむめさ
とあけ乃人さうさ
候さうさくはさうさ
牡丹ハ李唐の尾流を
さうさうさく遊子の

こ 秋城菊のさきさき
夕殿お菊のあはれ
音も雲の峰乃き
あはれもた
やうく 初秋の日
うそえてあ板と皮く
お馬の毛小鹿の音い
れ

の 秋のさきさき
あはれもた
やうく 初秋の日
うそえてあ板と皮く
お馬の毛小鹿の音い
れ

文王を釣つ翁ありて漁村の
夕陽を思ふ白雲はあはき
顔みせの興をばかしく雲
の巻もいとえ来まつ右の
ききしちかふ志あるの風乃ち
こころに危拂ぬの事ある
業まて其姿情をつくまふ

徘徊の自在を何れか
あつとて享むは月
影舞 徑の隅に草花
ありぬ

其窓

延享乙丑載秋九月

日本橋南三町目

吉田魚川彫

江戸本町三町目

西村源六版

丈刻堂書梓目錄

民家分量記

常盤貞尚作 全五冊
士農工商の才徳のつと
めを説く

野總茗話

同作 全四冊 右、後篇
林傳佛の大意を
いふ

民家童蒙解

分重記の後編の
分重記の前後と
其考ののち代と
は

田舎莊子外篇

依舟橋山作 全六冊
由ものふとて人
世の苦手をいふ

河伯井蛙文談

同作 全三冊 右、後篇
うハハと海との向答と
いふ 同く人の心と

天狗藝術論

同作 全四冊
刻律の真意と
其考ののち代と
は

六道士會録

同作 全五冊
武家の修徳法
八平生の
ふりかき空記を
いふ

英雄軍談

同作 全五冊
他書に
いふ 一、二、三、
四、五、と

近代世事談

新編 全五冊
近世の文家
其考ののち代と
は

江戸通本町三町目 西村源六

今川腰越状

全一冊

御家流消息

建初買文筆 全一冊

初学消息集

玉壺改八筆 全一冊
尚用及
其考ののち代と
は

假名文章

同筆 全一冊
尚用及
其考ののち代と
は

万要書札

同筆 全一冊
まれば
其考ののち代と
は

風月往來

同筆 全一冊
尚用及
其考ののち代と
は

庭訓往來

同筆 全二冊
大字四行

愛蓮説

廣澤筆
行書

歸去來辞

同筆 行書

自隨落 先生 風俗文集 及古部二册 北華輯

蝶比遊 全三册 北華選 松島紀行名所

不思庵書日記 全二册 自隨落先生作 北華輯

古今智惠枕 河内玄宅輯 全三册 翁の重宝ちり仕やうの 信をいらす

武家軍談 全三册 ひろくろをえ入

同軍鑑 全四册 ひろくろをえ入

武家功者物語 全三册 ひろくろをえ入

画圖百花鳥 得野探幽筆石中子写 全五册 五か百あやうまの 侍時丹あまると記す

縛本裁艸 全三册 梅風集全四册 新明題 追記 裁艸の事

新後明題 梅風集全四册 新明題 追記 裁艸の事

泉景境詩歌集 全三册 及入堂上地下の清 秀との

續景境詩歌集 全一册 名家の詩歌と集

和歌戀衣 大和河の秘伝とあり 和んのかうりといふ全二册

正運紀略 大運氏吉作折本一册 五代年号時世のかりりと かくく記す

老子本義 藤藤隱作 全二册 明の御弁の注と主として其 ありのふと補ひ記す

老子答問書 藤藤隱先生作 全二册 老子学の大要と問答子

蘆隱稿 南郭先生点檢 藤藤隱先生著述詩文

明詩選 全十三巻 自九至十三巻は 自壹至四巻は 全五至八 全初巻本

歷代帝王畧 南郭考訂長門坂の考 只朝歷代帝王の姓名年号 即早御在位長短一目瞭然如 同作 全一册

文筌小言 助語用字の注と改あり 甚学者三益あり 全一册

銀燭帖 廣沢先生門人 関源内書

中書指訣 善庭室憲著 全一册 筆法の三昧と記す

芙蓉菴八勝帖 折本一册 鳥石先生書 行草手本

使者帖 鳥石先生書 聊書手本

登樓賦 同筆 八分字手本

草書十字文 同筆 全二册 石物

七物帖 同筆 行書 全一册

禮部韻 鳥石先生校閱 高宗御書 全六册

江戶半大夫一曲とらつむ 全二册 校切本

前句甚附本 江戸半大夫 百十巻

俳諧のすり山 大徳 全一册 前句甚附本

増補芭蕉翁四季後吟全三册 土きくひ四季を神柱に記す 全三巻 後吟の事

露月集 全三册 月次集 教えええと記す

同集 全二册 月次追加金玉の声音と

同集 全二册 月次あこ追

同集 全二册 面白板のえと八百人との追 赤井の氷筆めつらき集

同友安久尺 近世有名俳人 全一册 四季の尺

同有渡日記 有渡の紀行 全一册 友の事

同犬椿葉 近之集 全二册

同何老姿 椒花述 全一册

支那書目録

釋親考

附 筆行説 伊藤東涯著 全一冊
歌麿の呼号と不雅な字
さ法儒の流と委のす

七經孟子考文

度量衡考

白石先生餘稿

全三冊 新井範後校
清文と集外書

停雲集

全二冊
同形

翻明令

龍山先生校訂
全二冊

伊呂波童蒙抄

全三冊 盛典作
いろはの極意をつま
ひのりふかす

冠註篋篋篋大全

同作 全五冊
つまひのりふかすの考へ
つまひのりふかす

和刺局方

官刻 全十二冊
局方校板及同局方校
久日徳備抄車廣物

醫學的

全二冊
楚山先生撰

醫要談

全三冊 未刻
楚山先生撰

阿彌陀如來出現記

全二冊
盛典述のりふかす

宗分禪師語録

全三冊

捷徑辨義

少門善嶋作 全一冊
真言密教の末味を片
のりふかす

大般若經轉義

折本一冊

粥飯日用鉢式

全一冊 旭昌述
鉢式の法度と考へ記す

遺身往來傳

全一冊 諦隱述
送身の奇特と記す

聖道衣料編

盛典作 全二冊
衣料の考へハハハハ

道中行程重寶記

懐中折本一冊

古今茶道論辨

淡谷玄春作
全一冊

同 孫娘の雲

立圃集 全一冊

同 反古拾遺

百華檀北述 全二冊
四知の佳句 香仙自作 後々ホ
いろくあつめのす

同 蘇藤集

雲上蓮手 全一冊
能諧の古々を以て後々ホ
わりのん

同 玄々前集

古今玄々集 全二冊
文章を以て 玄々の佳句
玄々の佳句 玄々の佳句

同 彩勺兄弟

玄々と美 全一冊
其後と注して初心の佳句

同 井蛙問答

半溪著 全一冊
後を以て 同答して玄々の佳句
引て 同答して玄々の佳句

同 其砧

貞佐七回忌 有佐
平砂 集全三冊

同 風乃末

其角 嵐雪 遠忌
寥和集

同 桃橘

其角 嵐雪 遠忌の歌仙
宋阿集

同 硯沢

黒落作 全二冊 硯沢
野河の地行 玄々の佳句

同 吾妻海道

奥州 松嶋 記がま八景ホ
かもの記 玄々の佳句

同 少々の氣

毛越集 全二冊
俳諧文章 玄々の佳句

同 續北代

全二冊 弁仙合の巨ま抜
青交堂 長巻

同 十々此煉

半仙集 全三冊
武蔵地方の方言 長巻板
江戸宗通十評

同 古才たれ

全一冊 芭蕉翁五十年忌
湖十集 玄々の文章 不々

同 老山集

全一冊 推入 玄々の文章
黒落集

同 後河百員

全一冊 月夜 玄々の文章
わりのん

同 江戸七歌仙

全一冊 獨吟集
江戸俳諧 宗通 元人

同 芭蕉林

全一冊
玄々の文章 中 玄々の文章

同 蕉翁拾遺

全一冊
玄々の文章

萬世 江戸御町鑑

全二冊 町所奉行年中
月表水立合月評定
五月七日月方組系
町年表月表町名主
及町火消方は組合
纏(運付)細其外町
委細給寄(久)之

萬世 江戸方角組各纏附 腰中両面 一收摺

新刻指書十字文 一冊 烏石先生筆

新刻草書十字文 一冊 同筆

老子本義徴 全二冊 盧隱先生輯

春臺碑帖 全二冊 南郭先生作 烏石先生筆

上父書 全一冊 同筆

唐詩聯選 全二冊 烏石人校 出来

俳諧綾錦

菊老石涼作 全三冊
後く名号と集るは秋と
然俳門流の一派後との

綾錦 鳥山彦

同作 全二冊
玄号 平百首といひの式はと
おくすは 歌書序破

古雪中菴 發句文集 更登希 尚書 後く雪中菴と太 未刻

漢籙分韻 全六冊 烏石人校 近日板行

能諧如比花衣 二冊 吏登輯

能諧温故集 全三冊 連谷輯 九七百年末古人發書并 當時句加正三撰之

能諧問答抄 全二冊 半素先生作 并能諧如比花衣口語傳

鴻臚頌蓋集 全一冊 龍門先生著 戊辰朝鮮人筆談

俳諧素問教為集 全二冊 貞依翁二分句分心

形者小抄 全一冊 烏石人校

